テーマＡ－３　【中学校　社会（人権･同和教育）】

みやき町立北茂安中学校　教諭　角田　梓

要　　旨

考え方の異なる集団が相互に共存し得る平和で民主的な社会を築くには，社会的事象を多面的・多角的に捉え，公正に判断する力を育成するとともに，意思決定の場面などで互いの考えの違いを受け入れ，自分や集団の考えを発展させていく力の育成も重要だと考える。そこで，本研究では探究的な学習の場面で，根拠を明らかにさせ，他者の考えと比較・検討させ，自分の考えと他者の考えを関わらせて再構築させる学習活動を行った。その結果，生徒は社会的事象について根拠を基に多面的・多角的に思考・判断し，その過程や結果を表現することができるようになった。

〈キーワード〉　①多面的・多角的な考察　　②「思考をつなぐ言葉」　　③相互理解

１　研究の目標

思いや考えをつないで思考する力を高めるために，自分の考えと他者の考えを比較・検討する場を工夫することを通して，考えを深め合わせる指導の在り方を探る。―一人一人を大切にする学び合い活動を通して―

２　目標設定の趣旨

平成20年の中央教育審議会答申で，中学校学習指導要領社会科の改善の基本方針として，「社会的事象に関心をもって多面的・多角的に考察し，公正に判断する能力と態度を養い，社会的な見方や考え方を成長させることを一層重視する方向で改善を図る」[1)]と示された。この答申を踏まえ，中学校社会科の目標は，「公民としての基礎的教養を培い，国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」[2)]と示された。これらのことから，中学校社会科では，社会的な諸事象について，平和で民主的な社会を目指して思考・判断し表現する力を育むことが求められていると考える。

考え方の異なる集団が相互に共存し得る平和で民主的な社会を築くには，互いの考えを理解し，妥協点を見付け，意思決定を行うことや，到達した結論を共有することなどが必要である。つまり，様々な考え方があることを受け入れ合いながら，自他の要求を共に満たすことができる妥当性の高い合意を目指して思考・判断し表現する力を身に付けさせることが必要だと考える。この力を身に付けさせることは，公民的資質の基礎を養うことにつながると考える。

平成23年度に実施された佐賀県小・中学校学習状況調査の結果から，「社会的な思考・判断」の評価の観点別正答率は，他の評価の観点別正答率と比べて低いことが分かった。所属校の２年生においても，社会的な諸事象について考えを述べさせる際は，表面的な印象や感想を述べるにとどまり，根拠を基に多面的・多角的に考察・判断し表現することはできていない。これらのことから，社会的な思考力・判断力・表現力を育むためには，明確な根拠を基に自分の考えをもたせ，他者との意見交流を行わせる中で新しい見方や考え方を発見させ，自分の考えと他者の考えをつなげて思考・判断し表現させることが有効であると考える。

そこで，本研究ではグループの研究テーマ，研究課題を受け，根拠を基に多面的・多角的に考察し，思いや考えをつないで思考・判断し表現する力を高めさせたいと考える。社会的事象について，根拠を基に自分の考えをもたせ，意見交流の中で自分の考えと他者の考えを比較・検討させ，自分の考えと他者の考えを関わらせて再構築させることで，根拠を基に多面的・多角的に考察し，互いの思いや考えをつないで思考・判断し表現する力が身に付くと考え，本目標を設定した。

３　研究の仮説

社会的事象について考察させる際に，「考えた根拠を示す活動」，「考えを比較・検討する活動」，「考えをまとめる活動」の３つの活動を設定し，学び合う場や思考を深める手立てを工夫すれば，根拠を明らかにして多面的・多角的に考察し，互いの思いや考えをつないで思考・判断し表現する力が高まるであろう。

４　研究方法

(1)　社会的な思考力・判断力・表現力の育成と学び合いに関する理論研究
(2)　質問紙法や社会的な思考力・判断力・表現力に関する自作テストを基にした生徒の実態調査
(3)　所属校での検証授業

５　研究内容

(1)　社会的な思考力・判断力・表現力の育成と学び合いに関する理論を明らかにする。
(2)　意識調査を行い，生徒の社会的な思考力・判断力・表現力の高まりを分析し，考察する。
(3)　所属校の２年生における地理的分野「九州地方～諫早湾干拓の問題について考えよう～」（３時間）と歴史的分野「幕末を生きた人々の思いを探る～江戸幕府が倒れた理由を考えよう～」（３時間）について検証授業を行い，仮説を検証し，手立ての有効性を示す。

６　研究の実際

(1)　文献による理論研究

ア　社会的な思考力・判断力・表現力について

小原は，社会的な思考力・判断力・表現力を「社会的事象を『読み解く』力」[3)]と示している。この力を養うためには，まず社会的事象の問題について「『どのように，どのような』『なぜ，どうして』『どうしたらよいか，どの解決策がより望ましいのか』という問い」[4)]を立てさせることが必要であるとしている。そして，これらの問いに答えさせるために，「資料から必要な情報を集めて読み取る」，「社会的事象の意味・意義を解釈する」，「事象の特色や事象間の関連を説明する」，「自分の考えを論述する」という具体的な４つの活動を設定することが有効であるとしている。

安野は，生徒が社会的事象の問題について考察するとき，「互いに相手が持ち合わせていない多様な経験を持ち，異なった視点でものを見る。そして，同じ物事に出会っても違った見方や考え方をする」[5)]と述べており，互いの思いや考えを関わらせて，よりよい解決策を考えさせていくことが，思考力や判断力の育成につながるとしている。このことから，社会的事象の問題についてそれぞれの生徒の考えを交流させ，新しい見方・考え方を発見させ，多様な見方・考え方からよりよく判断することを目指して比較・検討させれば，社会的事象について多面的・多角的に考察・判断させることができるであろうと考える。

以上のことから，社会的事象の問題について思考・判断し表現させるために，根拠を基に自分の考えをもたせ，自分の考えと他者の考えを比較・検討させ，自分の考えと他者の考えを関わらせて再構築させる学習活動の設定や，思考を深めさせる手立ての工夫が必要だと考える。

イ　学び合いについて

「学びの共同体」の授業改革として，佐藤は「つなぐ」ということを挙げている。これは，生徒と生徒との考えをつないだり，生徒と生徒自体をつないだりすることを指している。「つなぐ」ときの留意点として，自分の言葉で言わせること，それぞれの発言を尊重することなどを挙げており，これらの点に留意することで，生徒は違いについて敏感になり，個と個をすりあわせることができるようになるとしている。また，佐藤は「学び」を「自分と仲間の経験と知識を総動員して『問い』の解決へと至る協同的探究の過程である」[6)]と述べている。さらに，「学び合

う姿」を，生徒が互いに教え合う姿ではなく，他者の考えを聞いてそれとつなげて自分の考えを表現していく姿と示している。このような，互いの思いや考えをつないで思考を発展させていく学び合う関係を基盤とする「学びの共同体」を築くことの重要性を示している。つまり，生徒が自分の考えと他者の考えをつないで思考を広げ合い深め合うために，生徒一人一人が安心して自分の考えを表現することができる場が必要だと考える。

以上のことから，「学び合い」を「生徒一人一人が互いを尊重し，考えを交流させていくことによる，思考の広げ合いや深め合い」と捉える。一人一人の考えを尊重し，互いの思いや考えをつないで思考・判断し表現する力を高めさせるために，学び合う場の工夫が必要だと考える。

(2)　研究の構想

ア　根拠を基に多面的・多角的に考察し，互いの思いや考えをつないで思考・判断し表現する力を高める学習活動の設定や手立ての工夫について

(ｱ)　「考えた根拠を示す活動」，「考えを比較・検討する活動」，「考えをまとめる活動」の３つの活動の設定について

生徒に，根拠を基に自分の考えをもたせ，それを基にグループで互いの考えを交流させ，そして学級全体へと交流を広げながら，それぞれの段階で自分の考えを再構築させることで，思考を広げ深めさせることができると考えた(**図１**)。そこで，社会的事象の問題について考察させる際に，「考えた根拠を示す活動」，「考えを比較・検討する活動」，「考えをまとめる活動」の３つの活動を設定する。まず「考えた根拠を示す活動」では，生徒に社会的事象の問題について，イメージや経験を基にした主観による考えではなく，複数の資料などを根拠とした，より客観的な考えをもたせる。このときもたせた考えが，他者の考えと比較する際の判断の基準になると考える。次に，「考えを比較・検討する活動」では，グループでの意見交流と，学級全体での意見交流の２回の意見交流の場面を設定し，多様な見方や考え方に出会わせる。ここでは，複数の視点から社会的事象を捉えさせたり，視点が同じでも異なる考え方や解釈の仕方があることに気付かせたりして，自分の考えを異なった視点などから捉え直させ，再構築させることをねらいとする。最後に，「考えをまとめる活動」では，グループや学級全体での意見交流で広がった見方・考え方を整理させて，社会的事象の問題について，生徒に最終的な考えをもたせていく。このような活動を設定することで，根拠を基に多面的・多角的に考察・判断し表現する力が高まると考える。

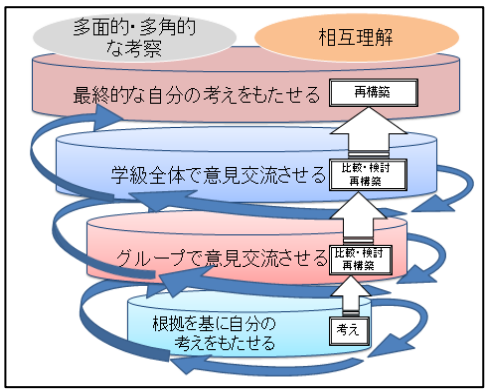


図１　研究のイメージ

(ｲ)　「思考をつなぐ言葉」について

生徒の思考を広げ深めさせるには，根拠を基に自分の考えと他者の考えを交流させ，新しく出会った見方や考え方を大切に，自分の考えを再構築させる必要がある。私の９月までの授業実践における，社会的事象の問題について考察させる場面を設定した学習では，生徒が意見交流で自分の考えを伝えるとき，結論を伝えることで交流を終わらせることが多く，考えた過程や結果を根拠とした資料を示して説明したり，意見交流の中で出された考えについて分からないことや疑問に思ったことを質問したりする姿は，ほとんど見られなかった。そこで，意見交流の際に，生徒に思考・判

○資料から必要な情報を集めて読み取る
・なぜ～と考えたのですか
・Ａの資料から…ということが分かるから，～と考えました
○社会的事象の意味・意義を解釈する
・なぜ～になったのですか
・それは，…するためです
・～で，その地域は…になりました
○事象の特色や事象間の関連を説明する
・～が起きると，…になるだろう
・なぜ～が起きると…になるのですか
・～が起きると△△になって…だからです
○自分の考えを論述する
・～だと考えます。なぜなら…
・たしかに○○という考えもありますが･･･
・しかし△△と比べたら…

資料１　「思考をつなぐ言葉」の例

断した過程や結果を説明させたり分からないことについて質問させたりするといった，生徒の思いや考えをつなげるきっかけとなる言葉を，本研究では「思考をつなぐ言葉」として，生徒に示した（**資料１**）。これらの言葉を用いさせることで，生徒自身が思考・判断した過程や結果を整理し表現することができると考える。さらに，互いの思いや考えをつないで思考・判断し表現する力が高まると考える。

イ　検証の視点と具体的な手立てについて

(ｱ)　【検証の視点Ⅰ】３つの活動の設定による，多面的・多角的に考察・判断し表現する力の高まり

生徒は，社会的事象の問題について考える際，イメージや経験を基にした主観によって思考・判断することが多く，資料を根拠として客観的に思考・判断するまでには至らないことがあった。また，生徒個人で社会的事象の問題について考えさせる際，一度に多様な見方・考え方を引き出させることは難しく，多面的・多角的な考察・判断までには至らないことがあった。そこで，根拠を基に多面的・多角的に考察させるために，３つの活動を単元計画に位置付けた（**図２**）。社会的事象の問題について考察させる際に，まず，資料を根拠とした自分の考えをもたせ，ワークシートに記述させる。次に，グループで意見交流をさせ，自分と異なる見方や考え方に出会わせ，最初の自分の考えと他者の考えを比較・検討させたり，新しい視点から捉え直させたりして，グループでの交流を終えた後の自分の考えを，資料を基にワークシートに記述させる。さらに，この活動を学級全体に広げ，考えの相違や対立に焦点を当て，質問させたり，視点毎に考えを分類したりして，複数の視点や立場から客観的に捉えさせ，最終的な自分の考えを，資料を基にワークシートに記述させる。以上のような活動を行うことで，複数の資料を根拠とした多面的・多角的な考察ができるようになると考えた。このように３つの活動を設定することで，捉える視点や根拠が増えたか，他者の立場を踏まえることができたか，複数の視点や立場から考察することができたかを検証する。

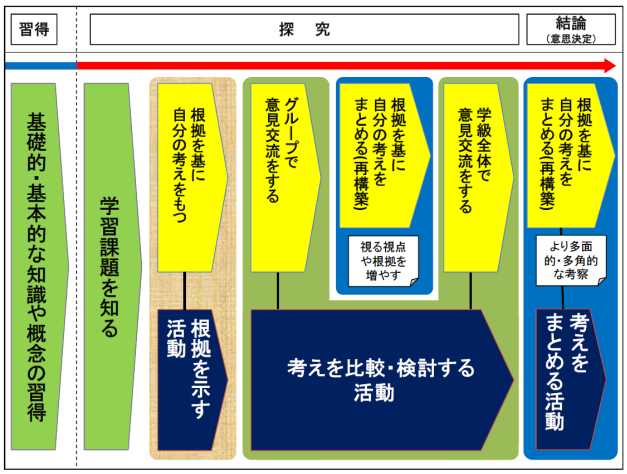


図２　３つの活動の単元計画への位置付け

(ｲ)　【検証の視点Ⅱ】「思考をつなぐ言葉」を用いることによる，互いの思いや考えをつないで思考・判断し表現する力の高まり

生徒は，社会的事象の問題について，考えを比較・検討する際何についてどのように意見を交流させていけばよいか分からなかったり，自分の考えをまとめる際考えたことを整理して論述することに難しさを感じたりしている様子があった。そこで，生徒に「思考をつなぐ言葉」を例示したワークシートを用いて意見交流をさせ，自分の考えをまとめさせることで，何についてどのように交流するのかについて見通しをもたせ，自分の考えと他者の考えをつないで思考を発展させることができると考えた。また，生徒に「思考をつなぐ言葉」を用いたワークシートを利用させることで，意見交流の中で発見した新しい見方や考え方を整理し，自分の考えをまとめることができると考えた。このように「思考をつなぐ言葉」を用いさせることで，互いの思いや考えをつないで思考・判断し表現することができたかを検証する。

(ｳ)　【検証の視点Ⅲ】自分の考えを表現したり他者の考えを聞いたりすることによる，相互理解の深まり

生徒は，意見交流の際，課題に対する自分の考えを明確にできなかったり，自分の考えに自信をもちづらかったり，自分と異なる他者の考えを聞いてもそのように考えた理由が分からなかったりしている様子があった。そこで，グループの意見交流で一人一人の考えを述べさせた後，付箋を用いてコメントを書かせたり，互いに質問させたりすることで，互いの見方や考え方の違いについて

理解させ，相互理解を深めさせることができると考えた。このように自分の考えを表現させたり他者の考えを聞いたりさせることで，相互理解が深まったかを検証する。

(3)　検証授業の実際と考察(第２学年)

ア　検証授業①及び検証授業②の単元の概略

(ｱ)　検証授業①　地理的分野(平成23年11月実施)

単元名　(２)ウ「九州地方～諫早湾干拓の問題について考えよう～」

主題名　(エ)環境問題や環境保全を中核とした考察

目標　九州地方の環境問題や環境保全の取組を中核として，それを産業や地域開発の動向，人々の生活などと関連付け，持続可能な社会の構築のためには地域における環境保全の取組が大切であることなどについて考えさせる。

(ｲ)　検証授業②　歴史的分野(平成24年１月実施)

単元名　(５)近代の日本と世界「幕末を生きた人々の思いを探る～江戸幕府が倒れた理由を考えよう～」

目標　欧米諸国のアジアへの進出を背景に，日本の開国とその影響について幕府や西国の雄藩，民衆などそれぞれの思いや考えに着目して，江戸幕府が倒れた理由について多面的・多角的に考察させる。

イ　【検証の視点Ⅰ】３つの活動の設定による，多面的・多角的に考察・判断し表現する力の高まり

検証授業①の抽出生徒のワークシートの記述を基に考察を行う(**資料２**)。

	生徒Ｂ	生徒Ｃ
学習の状況	社会的事象の問題について，根拠を基に自分の考えを述べることができるが，複数の視点や立場から考察するまでには至らない。	社会的事象の問題について，根拠を基に自分の考えを述べることはあまりできていない。自分の考えをまとめて論述することも苦手であるが，じっくり取り組むことができる。
３時目	資料7を見ると、規制緩和の後の農作物が増加していることが分かるので、日本の食料自給率も増加すると考えられます。 資料8を見ると、大水害での農産物被害額が緩和の前と後では、約1億4百万円の差があることが分かります。	漁業は、ノリの不作などの漁業被害があり、農業は漁業に比べて規制を緩和したあとわるくても良い方向にかわっていきました。でも、漁業は困っている。なぜなら魚などが減ってしまうから。そしたら海がよごれていって地球が汚れて環境にわるい。
６時目	私は、開門すべきだと考えます。友達の意見を聞いて少し迷った意見もありました。それは、開門すると今までかけた干拓の費用がもったいないということ。もう1つは、食物の自給率が下がり生活に影響が出るということです。だけど、高波などの災害が起きたときだけ開門すればいいので、すぐだめなことと思います。そして、生活には、開門すると影響がでるけど開門すれば、環境に影響がでます。資料4からは、開門すると赤潮が広がり、水質が悪化します。すると、生き物の命を失ったり自然が豊かでなくなります。たしかに、安全性や利便性も大事だと思うけど、人間のせいでこれ以上、生き物を傷つけるのは、いけないと思います。人間は、魚の命をいただいているのだから、感謝しないといけないのに、安全性や利便性をとってしまうと、生き物が犠牲になります。 だから、開門すべきだと思います。	私は最初は開門すべきだと考えていました。なぜなら開門して自然の生き物、固有種などを失えば、食物連鎖ができなくなるし、我々は、生き物の命をいただいて、生きていっているのだし、命はお金よりも大切な物だと思いますです。開門したら、防災ができて、守って新鮮な野菜が出来て良いことです。たしかに、生き物の命がなくなってしまったり、海の汚染がおきてしまうというのもありますが、開門も閉門もできるから、開門では、生き物の命を守れて、高潮による被害がおさえ、塩害で、生活に影響をもたらしてしまうけど、閉門したら、開門では、欠点となっていた高潮による被害や作物の塩害が防災できて、利点になり、意義は開門しておいて、かった生き物の命を守ることができなかったのが、守れるから、定期的に、開門して、その時に、あまり料理などで、油を使わないようにしたり、自分達の生活で、環境を悪化させないように、意識して、工夫して、暮らしていけば、地球はずっと存在し続けることができるのではないかと考えました。

・━━は，本事象を捉えた視点や根拠，他者の立場を踏まえた部分を示す。
・┅┅は，開門の立場と閉門の立場の，両方の立場からの比較・検討を行った部分を示す。

資料２　抽出生徒の学習の状況と検証授業①での記述内容の変容

生徒Ｂは，「考えた根拠を示す活動」では，「食料自給率」と「農作物の被害」に関する資料を根拠にして，閉門の立場を取って自分の考えをまとめた。その後，「考えを比較・検討する活動」では，グループと学級全体の意見交流で，開門の立場を取った生徒の考えと比較した。その

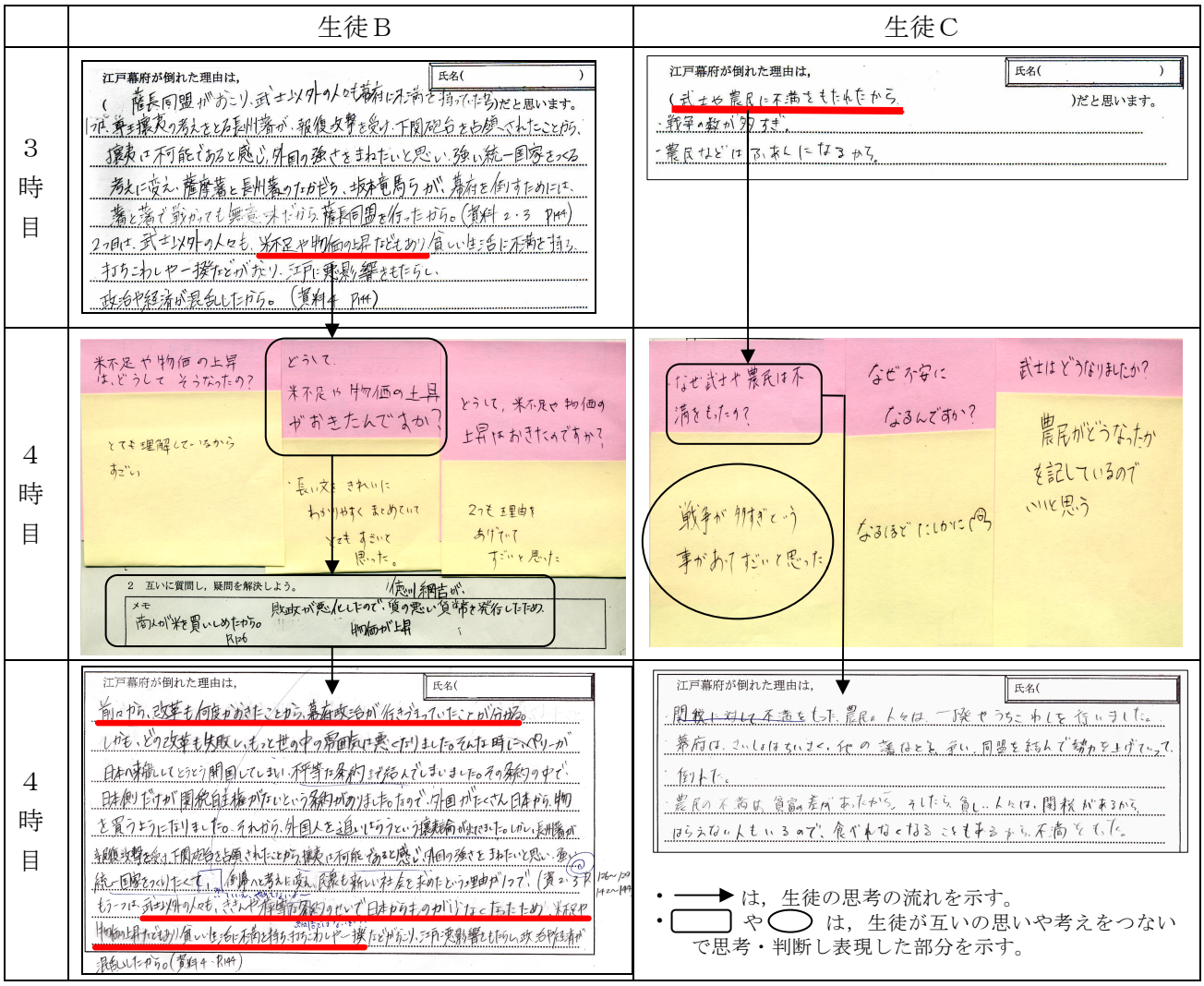
結果，開門の立場と閉門の立場の，両方の立場から，それぞれのメリットとデメリットの面について考えることができた。最後の「考えをまとめる活動」では，諫早湾干拓の問題について，経済性や防災の視点だけでなく，生命尊重や環境保全の視点から，環境保全と開発の優先順位を考えて自分なりの考えを再構築することができた。

生徒Ｃは「考えた根拠を示す活動」では，「ノリの不作」に関する資料を根拠にして，開門の立場を取って自分の考えをまとめた。その後，「考えを比較・検討する活動」では，グループと学級全体の意見交流で，閉門の立場を取った生徒の考えと比較し，開門の立場と，閉門の立場の両方の立場から，それぞれのメリットとデメリットの面について考えることができた。最後の「考えをまとめる活動」では，諫早湾干拓の問題について，生命尊重や経済性，防災の視点から考察し，環境保全と開発の双方のバランスを取って自分なりの考えを再構築することができた。

これらのことから，２人の抽出生徒は，グループや学級全体の意見交流によって自分の考えと他者の考えを比較・検討することができ，諫早湾干拓の問題について捉える視点を増やし，複数の視点や立場から考察・判断し表現したと考える。

ウ　【検証の視点Ⅱ】「思考をつなぐ言葉」を用いることによる，互いの思いや考えをつないで思考・判断し表現する力の高まり

検証授業②の抽出生徒のワークシートの記述や検証授業の様子を基に考察を行う（**資料３**）。



資料３　検証授業②での抽出生徒のワークシート

生徒Ｂは，江戸幕府が倒れた理由の一つに，武士以外の人々が「米不足や物価上昇」に不満をもっていたのではないかと考えた。その後，「思考をつなぐ言葉」を用いて，グループで意見交流をする

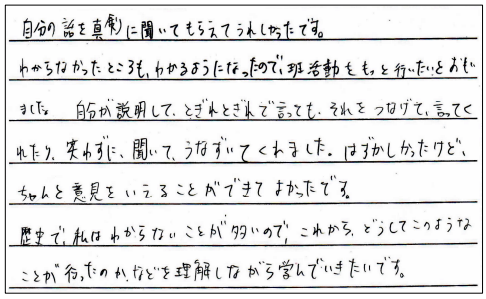
中で，班員から「どうして米不足や物価の上昇が起きたのか」と質問を受けたが，うまく答えることができなかった。すると，グループで検討し，協力しながら教科書や資料集を用いて調べ，「商人が米を買い占めたこと」，「質の悪い貨幣を発行したこと」など関連がありそうな事柄を発見していった。班員の一人が，江戸中期以降改革が行われていたことに気付き，「なぜ改革が行われたのだろう」と投げ掛けたところ，「政治がうまくいってなかったからではないか」と発言し，他の３人も納得し，「以前から幕府の政治はうまくいってなかった」と考えをつなげ，意見交流後の記述に加えた。

生徒Ｃは，江戸幕府が倒れた理由に「武士や農民に不満をもたれたから」と考えた。その後の意見交流で，生徒Ｃは班員から「なぜ武士や農民に不満をもたれたのか」と質問を受け，「戦争が多すぎるからではないか」と答え，班員から戦争という視点には気付かなかったという意見をもらった。その後，「農民だけではなく武士も幕府に不満をもっていたのはなぜか」という質問に対して，倒幕派の武士の立場から理由を考えた班員２人が説明をした。生徒Ｃは「日本は関税を決められないから，お金がなくなって人々が不満をもっていた」，「貧しい人はたえられない」といった班員の考えを聞いて，「関税って何」と質問した。「輸出入にかかる税金だよ」，「日本のものがたくさん輸出されて品不足になり，物価が上昇した」，「一揆や打ちこわしが増えていった」，「だから幕府の信頼がなくなった」，とつなげ，意見交流後の記述に加えた。

これらのことから，２人の抽出生徒は「思考をつなぐ言葉」を用いて，互いの思いや考えをつないで思考・判断し表現したと考える。

エ　【検証の視点Ⅲ】自分の考えを表現したり他者の考えを聞いたりすることによる，相互理解の深まり

検証授業①と検証授業②での抽出生徒のアンケートの記述や検証授業の様子などを基に考察を行う。生徒Ｃは，自分の考えに自信がもてないことから，人前で自分の考えを話しづらいと感じている。しかし，検証授業①のグループでの意見交流の場面では，班員の発表に対して「なぜですか」と質問をしたり，班員からの質問に笑顔でうなずいたりして，交流に活発に参加した。検証授業②後のアンケートでは，他者の考えを聞いて理解が深まったことや，自分の考えを他者と交流させることの喜びを感じている様子がうかがえる(**資料４**)。２月上旬，所属校で実施した生活アンケートにおいて「目標をもって取り組んでいること，努力していることなど」を書く欄に生徒Ｃは「班活動でみんなの中に自分から入っていくこと」と書いた。自分の考えと「つなげて」発言してもらった体験の積み重ねが，自信につながったと考える。これらのことから，自分の考えを表現し，他者の考えを聞くことで相互理解が深まり，他者の考えを理解しようという思いが高まったと考える。


自分の話を真剣に聞いてもらえてうれしかったです。
わからなかったところも，わかるようになったので，班活動をもっと行いたいとおもいました。自分が説明して，とぎれとぎれで言っても，それをつなげて，言ってくれたり，笑わずに，聞いて，うなずいてくれました。はずかしかったけど，ちゃんと意見をいえることができてよかったです。
歴史で，私はわからないことが多いので，これから，どうしてこのようなことが行われたのかなどを理解しながら学んでいきたいです。

資料４　検証授業②後の生徒Ｃの感想

オ　学級全体の考察

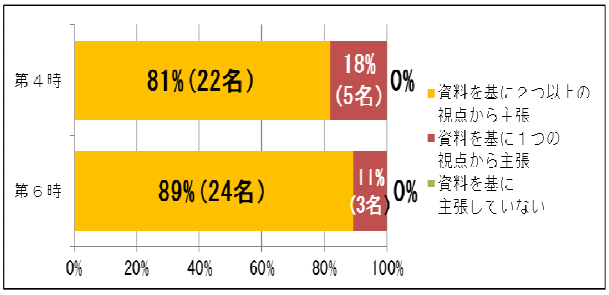


図３　検証授業①学級全体の記述内容の変容

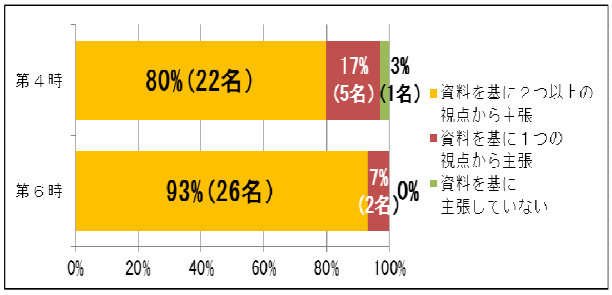


図４　検証授業②学級全体の記述内容の変容

学級全体の生徒の変容を，ワークシートの記述やアンケートを基に考察する。検証授業①，検証授業②共に，根拠を基にして複数の視点から考察し記述する生徒が増加した(**図３**，**図４**)。視点の数に変化がなかった生徒も，根拠の数が増え，より具体的な記述になった。検証授業前後に行った生徒の

意識調査の集計結果では，社会的事象の問題について考察する際，「なぜそうなったのか」と原因や背景を考えたり，「～だから…があったんだ」と関連付けて考えたりする生徒の増加が見られた。また，意見交流をする際，根拠を明らかにして他者に伝える生徒の増加が見られた（**図５**）。生徒の感想では，「人の意見を聞くと，自分の意見とつながって，よい考えが広がっておもしろかったです」，「自分とは違う意見の人が自分の意見に加わってよりよい考えが浮かび上がったりして楽しかったです」など，自分の意見と「つながる」ことや，異なる考えを受け入れて新たな考えを見いだすことの楽しさに触れた記述が多く見られた。

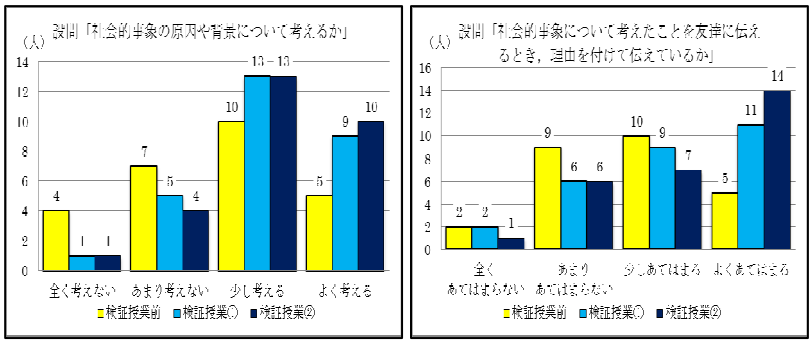


図５　生徒の意識の変容

これらのことから，根拠を明らかにして多面的・多角的に考察し，互いの思いや考えをつないで思考・判断し表現する力を育てるために，社会的事象について，根拠を基に自分の考えをもたせ，「思考をつなぐ言葉」を用いて自他の考えを比較・検討させ，自分の考えを再構築させることが有効だと考える。

7　研究のまとめと今後の課題

(1)　研究のまとめ

本研究を通して，次のようなことが明らかになった。

- 根拠を基に自分の考えをもたせ，他者と意見交流をさせ，自分の考えを再構築させる３つの活動を設定したことで，社会的事象を多面的・多角的に考察・判断し表現する力の高まりが見られた。
- 「思考をつなぐ言葉」を用いて意見交流をさせたことで，分からないことを質問して自分と異なる他者の見方や考え方を理解し，互いの思いや考えをつないで思考・判断し表現する力の高まりが見られた。
- 「学び合い」により，一人一人の考えを尊重する姿勢や自己肯定感の高まりが見られた。

(2)　今後の課題

- 学級全体での学び合い活動における手立ての工夫
- 自他を尊重しようとする態度及び実践力の育成

《引用文献》

1)　中央教育審議会　『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）』　平成20年１月17日　p.79

2)　文部科学省　『中学校学習指導要領解説　社会編』　平成20年９月　p.139

3)4)　小原　友行編著　『「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン　中学校編』　平成21年３月　明治図書　p. ８，９

5)　安野　功　『社会科授業力向上５つの戦略』　平成18年11月　東洋館出版社　p.80

6)　佐藤　学　『教師花伝書－専門家として成長するために－』　平成21年４月　小学館　p. 21

《参考文献》

- 文部科学省　『人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕』　平成20年３月